

News Letter

演劇の総合的研究と演劇学の確立

The 21st Century Centre of Excellence Programme, Waseda University
Development of Research and Study Methodologies in Theatre

拠点リーダー挨拶	1
特集記事	
坪内逍遙シンポジウム報告	2
◆古典演劇研究コース	3
◆アーカイブ構築研究(演劇)コース/ アーカイブ構築研究(映像)コース	4
◆舞踊コース/西洋・比較コース	5
◆東洋コース/芸術文化環境研究コース	6
イベントカレンダー	7
新刊紹介/編集後記	8

ニューズレター創刊に寄せて

21世紀COE「演劇の総合的研究と演劇学の確立」拠点リーダー

竹本 幹 夫



ニューズレター創刊号をお届けする。本拠点ではこれまで、電子媒体による広報を中心として、ニューズレターの類はあえて刊行しない方針で運営してきた。紙媒体の広報誌は人的・資金的にコストが掛かりすぎるであろうと考え、こうしたところは極力省力化して、研究の実質を進めた方がよいと判断したためである。しかしながら、約束された研究期間も半ばを越え、研究の最終的なとりまとめや活動の全体報告といった必要性をにらんでの用途もあると考えて、このたびの刊行となった。

本誌は、COE客員専任教員および客員研究助手諸氏の協力により制作された。年3回の刊行予定である。内容の中心は、各期の活動報告となろう。また行事予定についても、できる限り掲載したい。

現在、本拠点では「アーカイブ構築」「演劇理論」「古典演劇」「芸術文化環境」の4研究コースがさらに細分化して、多彩な研究活動を展開している。例えば「アーカイブ構築」コースは演劇と映像に、「演劇理論」コースは東洋と西洋と舞踊に分かれ、また西洋演劇理論研究はさらに複数のグループを派生している。「古典演劇」コースは能楽・浄瑠璃・歌舞伎(日本舞踊を含む)のグループそれぞれが、複数の研究プロジェクトを運営している。「芸術文化環境」コースも専任教員を一名増員し、研究活動がさらに多様化し、豊かになった。

これらの中には、演劇博物館が取得したCOE以外の外部

資金による研究との共同事業や、他大学COEとの共同プロジェクトをはじめとする外部機関との提携事業といった、複合的な研究事業を運営する場合もあり、しかもそうした事業は年を追って増加しつつある。各事業は、大小規模の年間150回以上にわたる各種研究集会という形で実施されるのであるが、中には急に決まる場合もあって、せっかくの好企画であっても事前に広報をしそびれてしまうことすらある。またそうした活動の一端を、年刊の研究紀要だけでは具体的に報告しきれない場合も少なくない。もちろんこれら事業はおおむね、拠点の研究紀要に何らかの総括的報告を行い、あるいは独自に単行本刊行などの成果発表を行うのであるが、年3回のニューズレターという形でまとめておけば、「イベントカレンダー」の形で直前の広報が出来るし、各コースの三分の一期ごとの研究状況報告は、後々の記録としても便利かと思う。折々に刊行される事業推進担当者による単行本なども、可能な限り紹介していきたい。

今後、小誌は本研究拠点の広報活動の中核を担うことになるであろう。もちろん電子媒体による従来型の広報—ホームページや電子メールによるお知らせ—も同時に行うのであるが、簡要を旨とする電子媒体の広報とはひと味違った、拠点の肉声を伝えるものにしたい。小誌が、拠点の活動内容をよりよく知って頂くためのよすがとなれば、何よりである。

坪内逍遙没後七十年シンポジウム

2005年6月5日(日) 13:00～17:30

早稲田大学国際会議場井深大記念ホール

古典演劇研究(歌舞伎・日本舞踊)コース 事業推進担当者 古井戸秀夫

楽劇学会・歌舞伎学会・舞踊学会、三つの学会に逍遙協会・早稲田大学演劇博物館21世紀COE演劇研究センターが協賛し、5団体の共催による二つのシンポジウムが開催されました。

三つの学会から推薦された演劇、舞踊、音楽(邦楽)の研究者に加えて、ゲストとして音楽(洋楽)、近代文学、美術の研究者を招き、芸術の諸分野の動向を探る学際的なシンポジウムが実現しました。第1部は、COE演劇研究センターの舞踊学コースが協賛したものです。坪内逍遙が『新楽劇論』で提唱した、あたらしい国民演劇としての舞踊劇・音楽劇の方向を再検討するものです。演劇研究センターに所属する邦舞と洋舞の研究者に日本の近代演劇の研究者が加わる共同研究で資料集を作成し、それをもとに2度にわたる綿密な打ち合わせを経て実現されたものです。

第2部は、近代国家の成立と国民のアイデンティティの形成に向けて、芸術は歴史をどのように描こうとしたのかを探るものです。歌舞伎・日本舞踊コースが3年間にわたり行ってきた「演劇と美術」の研究成果を踏まえて、演劇と美術の研究者が基調報告を行いました。このシンポジウムでも、演劇研究センター所属の歌舞伎と近代演劇の研究者が、シェイクスピア研究・美術史研究の研究者の協力を得て資料集を作成し、それにもとづいて2度の打ち合わせを経て準備されたものです。

楽劇学会・歌舞伎学会・舞踊学会の会員をはじめとして、約300名の聴衆を前に、ゲストを交えた熱心な討論が展開されました。



第1部『新楽劇論』(1904)を読む
[左より]司会:羽田昶(楽劇学会会長・能楽)・竹内道敬(楽劇学会・邦楽)・渡辺裕(東京大学・美学芸術学)・中島国彦(早稲田大学・日本近代文学)・古井戸秀夫(舞踊学会・歌舞伎)



第2部『我が邦の史劇』(1893)を読む
[左より]司会:上村以和於(歌舞伎学会会長・歌舞伎評論)・河田明久(早稲田大学・近代美術)・神山彰(歌舞伎学会・近代演劇)・三浦雅士(舞踊学会・文芸評論)・渡辺保(歌舞伎学会・演劇評論)

新プロジェクト発足報告 「翁猿楽復元研究会」

本年度より新プロジェクト「翁猿楽復元研究会」が発足した。5月18日、第一回研究会として、拠点リーダー竹本幹夫演劇博物館館長をはじめ、客員講師・研究協力者・特別研究生約10名が集まった。当プロジェクトではかつて南都などで大和猿楽四座の行っていた古形の翁猿楽を復元することを目標とし、第一回はそのための作業方法についての討議、今後の予定確認等を行った。

再来年新春、横浜能楽堂での上演に向けて、月に一度のペースで研究会を行う予定で、すでに6月15日には観世流シテ方観世鏡之丞氏(再来年の公演出演予定)を迎えて第二回研究会を開催した。研究会の詳しい経過報告・稽古の様子は次号以降追って報告する予定である。(客員研究助手 江口文恵)



第一回研究会の様相

歌舞伎舞踊・八変化「花翫曆色所八景」の復活上演

2005年5月28日(土)、国立劇場舞踊公演において八変化所作事^{はなごよみいろのしゅわけ}「花翫曆色所八景」が上演された。この作品は天保十年(1839)三月江戸中村座の初演で、今回がそれ以来百六十六年ぶりの復活上演となった。花柳寿楽氏の監修、国立劇場芸能部長織田紘二氏による演出、そしてCOE演劇研究センター客員講師鈴木英一氏が台本補綴を担当した。

COE演劇研究センターの「舞踊正本研究会」は、歌舞伎・日本舞踊の研究員に加え、研究協力者として近世邦楽の研究者を招き、歌舞伎の舞舞台本の発掘ならびに復曲のための研究を行なってきた。「花翫曆」もその研究成果のひとつで、鈴木英一氏が国立劇場の「復活上演候補作品調査検討会」に推薦し復活上演が実現したものである。「舞踊正本研究会」では、鈴木英一氏を中心に初舞台本や役者絵・番付・音源等、おもに演劇博物館所蔵の資料を活用して初演の舞台を調査し、約6ヶ月をかけて復活台本の作成に取り組んだ。その研究成果は、演出・衣裳など当日の舞台に反映されたほか、研究会参加者が分担して公演プログラムに「作品解説」を執筆した。(特別研究生 金子健)

COE公開講座「浄瑠璃」

「木下蔭狭間合戦」壬生村の段

浄瑠璃・竹本綱大夫／三味線・鶴澤清二郎／解説・内山美樹子

2005年5月30日(月) 於・早稲田大学小野記念講堂



今回のCOE公開講座「浄瑠璃」では、人形浄瑠璃におけるいわゆる「太閤記物」の人気曲として、明治・大正期まで通し上演も頻繁に行われていた「木下蔭狭間合戦」中の、九冊目「壬生村の段」を取り上げて解説および奏演を行った。前々回の同講座では、「木下蔭狭間合戦」七冊目「竹中砦の段」が、竹本綱大夫・鶴澤清二郎両師によって昭和九(1934)年以来約七十年ぶりに復活奏演されたが、今回の「壬生村」も、大正九(1920)年御霊文楽座での上演を最後に現在までの八十五年間、文楽での上演記録が全くないものである。

当日は、「壬生村」の詞章にも「早や二十三年跡の今月今日、丁度この様なしたへ 雨が降つての、物凄い夜道を芥川へ掛かる所で…」とある通りの雨模様であったが、会場には立ち見も出て、用意した資料が不足するほどの大入りとなった。

大勢の聴衆を前に、まず演劇博物館副館長・秋葉裕一教授の挨拶、内山美樹子教授による演目解説が行われ、続いて竹本綱大夫・鶴澤清二郎両師による素浄瑠璃「壬生村の段」が奏演された。十代の頃に「壬生村」の稽古を受けたという綱大夫師によって、八十五年ぶりに公に上演された同曲が、今回の講座を契機として次代へ継承され、人形付きの本公演でも演じられる日が来ることを、強く期待したい。(特別研究生／演劇博物館助手 田草川みずき)

アーカイブ構築研究(演劇)コース 活 動 報 告

本コースでは電子媒体による拠点研究成果の公開および情報発信として公開データベースの拡充を進めているが、ここでは昨年度から今年度にかけての活動から研究情報基盤の整備に関するものをピックアップしてごく簡単に述べる。

まず拠点の研究基盤として導入したデータベースシステムについては昨年度より見直しを進め、今年度からはより汎用的・標準的な新規システムを導入・稼働している。このシステムは主要部分をすべてオープンソースアプリケーションで構成したため低コストでの構築・運用が可能であり、また特定のデータベースシステムに依存せず文字データをプレーンテキストとして格納しているため、フリーキーワードによる全文検索など柔軟に情報を活用することができる。



演劇博物館公開データベース
「デジタル・アーカイブ・コレクション」
<http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/>

動画・音声資料の電子化については演劇資料特有の問題点の洗い出しを行い、実験的なWeb公開を検討している。対象資料としては映像アーカイブ班が復元した映画フィルムや、演劇博物館所蔵の浄瑠璃稀曲音源資料、民俗芸能記録映像資料などを候補としている。動画・音声資料のWeb上での公開にあたっては、配信アプリケーション導入、サーバ負荷分散、データ容量の増大などの理由により、サーバ機器の追加導入が必須であろう。

関連する動きとしては、昨年度から演劇博物館研究部門を母体に申請し「演劇情報総合データベース」として採択された研究成果公開促進費による活動が挙げられる。従来の公開データベースをより広範囲かつ多面的・立体的に発展させ、演劇研究においてまず調査されるべき情報ノードあるいは総合的な演劇研究ポータル構築・提供を目指して基礎研究を進めつつある。今後、COEにおいて行われる資料収集・整理・考証について、その成果を研究成果公開促進費により書誌・考証データあるいは電子化資料としてデータベース上で順次一般に公開していく予定である。(演劇博物館 山本浩幾)

アーカイブ構築研究(映像)コース 活 動 報 告

アメリカ議会図書館が所蔵するD・W・グリフィスの初期短編作品(ペーパー・プリント版)の16mmコピー・フィルムを収集・分析し、この映画史上の巨人の足跡を実証的に辿ろうと試みる「グリフィス・プロジェクト」も今年で二期目を迎える。本プロジェクトの作業ではステンベックというフィルムの再生機械が用いられており、一般的には手に触れる機会のほとんどない映画フィルムを実際に扱う経験を研究者に積ませる契機をも与えてくれている。

収集するフィルムは、彼が映画監督としてのキャリアをバイオグラフ社で開始した最初期の作品を対象にしており、特に本プロジェクトでは、ビデオやDVDなどのソフトが流通しておらず、通常ではほとんど目にすることのできない1908年から1910年にかけての彼の監督作品の収集に力点を置いて活動を進めている。その中には、彼が監督としてではなく、俳優や原作の提供者としてのみ作品製作に参加した作品も含まれており、彼の創作活動の軌跡を多角的に検証する材料をも併せて提供してくれる。

昨年度の活動を通して改めて実感されたのは彼の作品世界のもつ多様性である。その多様性は、彼の監督作品が、ごく初期から実に多岐にわたるジャンルの主題を扱っていたことに多く起因している。それと同時に、映画史上は「移行期」の作品として区分され、古典的手法の揺籃期の産物ともいえるそれらの作品群を、単純な進歩史的な見地から分類、系統化することの危うさを我々に痛感させる契機をも与えてくれている。

かくして、現在、我が国有数の初期グリフィス作品のアーカイブとしての陣容が演劇博物館に整いつつある。このコレクションが、欧米諸国において近年ますます興隆しているグリフィス研究の、日本における活動拠点の基の一つとなることは間違いないだろう。この偉大な映画作家の初期作品に容易に接する貴重な場が増えることは研究者にとっては望外の喜びである。(特別研究生 檜山博士)



舞踊コース 活動報告

市川雅ダンスコレクション・アーカイブ構築

演劇理論研究(舞踊)コースでは、「日本における舞踊学の確立」に向け理論、実技の両面からその基礎研究をすすめる一方、同大学演劇博物館アーカイブ構築データベースを利用して、貴重な舞踊資料の収集と分析を目的とした「市川雅ダンスコレクション・アーカイブ構築」をすすめてきました。この度、コレクション本体を構築する洋書と書のデータ化が終了、広く舞踊研究者に公開され反響を呼んでいます。

故市川雅章客員教授(1937-1997)の研究対象は広く世界の舞踊全般にわたり、バレエ、モダンダンスをはじめ、新舞踊、舞踏、コンテンポラリーダンス、大衆芸能、レビューのほか、各国各地の民族(俗)舞踊、文化人類学、現代哲学、パフォーマンス・アート、現代美術、映画等々の資料が含まれます。和書約750点に対して洋書約960点、貴重古書では19世紀なかばから20世紀前半、特に戦前の珍しい文献が見られます。また、近年の舞踊書の収集にも広い目配りが感じられ、変化の激しい現代ダンスの鑑賞にも役立つ資料が揃っています。外国舞踊雑誌は約60タイトル、特に1920年代、30年代からの古雑誌の収集は、今後の舞踊研究に貴重なデータを提供するものと注目されています。(客員教授 國吉和子)



和書、洋書コレクションの一部

西洋／比較コース 活動報告

演劇理論研究(西洋／比較)コースでは学外から様々な研究者をお招きして数多くの講演会を企画しています。今回はそのうちから2005年度4月から6月までに行われた二つの講演会について紹介します。

1. 「ポルトガルの演劇：歴史観と現在の展望」

講師：アンドレ(Joao Maria Andre)教授 (ポルトガル・コインブラ大学)

2005年4月1日(金) 15:00～18:00 / 西早稲田キャンパス6号館318教室(レクチャールーム)

ポルトガルの演劇の歴史に関して、16世紀初頭(歴史上の起源)、18世紀(第二の重要な時期)、19-20世紀(軍事政権下の状況)、1960年代(独裁体制の終焉)、1974年の平和的無血革命以後(民主主義下における文化活動の活性化)という具合に俯瞰をし、また劇場、劇団、支援体制などに関する展望を述べて頂いた。(特別研究生 森佳子)

2. 「コンメディア・デッラルテの研究と舞台上演」

講師：高田和文教授 (静岡文化芸術大学)

2005年5月28日(土) 14:40～16:40 / 戸山キャンパス31号館311-312教室

研究に関する参考文献の紹介から始まり、映像や絵を交えながら、キャラクターの紹介や、現在コンメディア・デッラルテがどう捉えられており、実際の舞台上演の場においてどのように復元が試みられているか、実例を挙げてお話を頂いた。

■プロジェクト紹介

今年度、演劇理論研究(西洋／比較)コースは九つのテーマ別プロジェクト研究を抱えています。各プロジェクトが各自研究会・勉強会を催しています。

第一回 「オペラ／音楽劇研究会」

これまでのオペラ研究は主に音楽学の領域で展開され、音楽の一分野としての「劇音楽」が、もっぱらその中心的な研究対象として関心を集めてきたが、オペラは総合的舞台芸術でもあり、「音楽劇」としての演劇的側面も無視できない。ところが音楽学の枠内におけるオペラ研究では、その面は軽視されがちとなり、一方演劇学はオペラ／音楽劇を殆ど視野の外においてきた。このような研究上の問題は、オペラ史や演劇史の記述に偏向をもたらし、またオペラというメディアの本質的理解を困難にしてきた。こうした研究方法の限界は、近年特に明らかになりつつある。演劇・オペラといった従来の個別ジャンルを、パフォーマンス・アーツ、表象芸術等の概念において総合的に把握する試みが重要性を帯びているためである。本プロジェクトは、こうした問題意識のもと、演劇・音楽・オペラ・文学・思想・歴史を専門とする研究者を結集し、演劇学に立脚したオペラ／音楽劇の総合的研究を目指している。



東洋コース 活動報告

演劇理論研究(東洋)コースは、COEプログラム開始以来、「東アジア演劇における近代」という大枠のテーマ設定のもと、各種の研究活動を実施してきた。現在取り組んでいる主な課題は、「近現代中国演劇における身体・教育・政治」、および「中国演劇と西洋近代の受容—文明戯を中心に」の二つである。

「近現代中国演劇における身体・教育・政治」については、清末民初から現在に至るほぼ百年の間に、啓蒙宣伝の媒体となることを期待されてきた中国の演劇が、それぞれが属する時代、あるいは共同体のために何を表象してきたのか、またその現場において俳優の身体が如何なる形で作り出されてきたのか、といった一連の問題を、主な関心の対象としている。

この課題についてはこれまで、清末に始まる演劇による社会教育や、样板戯を頂点とする中国共産党のメディア戦略、他の社会主義諸国との類似性、さらに演劇と映画との相互影響、あるいはよりミクロな俳優養成の場における身体技法の伝達など、複数のトピックが扱われてきた。これと同時に研究者間の資源共有のため、『人民日報』や『紅旗』等主要資料の演劇関連記事目録作成の作業が現在進行中である。

また二つの目の課題である「中国演劇と西洋近代の受容—文明戯を中心に」の論及の対象である文明戯は、後の中国話劇の萌芽であると同時に、建国初期まで演じられていた劇種の一つでもあり、そしてまた民国期の映画界とも関連の深い、大変ユニークな研究対象である。

この課題をめぐっては、日本の明治・大正期の演劇界とのかかわりや、上海の他劇種との影響関係、あるいは映画界との相互の連携など、いくつかの話題がこれまで扱われてきている。またこの研究課題は、学術フロンティアの研究プロジェクトと連動しており、研究文献目録の作成や、国際シンポジウムの開催など一連の活動が計画されている。

ここ十年ほどの日本における中国演劇研究は、時代、対象ごとの細分化の度合いを深めつつ、一方で周辺学問領域との相互乗り入れが進んでいる。本コースの研究活動も、こうした趨勢の一つの表れといえるだろう。

なお上述の研究内容については、定例研究会の開催を通じて、参加メンバーの最新の研究成果を共有し合うとともに、外部講師による特別講義や国内研究集会、国際シンポジウムなどを不定期に催し、研究者間のネットワークの構築、および情報の流通に努めている。(事業推進担当者 平林宣和)



李少春派孫悟空
(演劇博物館所収写真資料)
1950年代、名優李少春によって創られた孫悟空の臉譜

公開勉強
会の様子



芸術文化環境研究コース 活動報告

公開勉強会「指定管理者制度を考える」3月23日(水) 19:00~21:00

指定管理者制度が導入され、公立の劇場やホールの運営主体に民間事業者も参入できるようになった。この勉強会は、財団法人、ビルメンテナンスや舞台管理の企業、NPOといった視点から劇場の現場の問題を捉え、指定管理者制度等との関わりの中で今後の劇場運営への展望を考えていく場としてスタートした。こうした組織の関係者や研究者を中心に40名ほどが参加した。

冒頭、大野洋氏(CBCメソッド代表)から、現場のスタッフと研究者の共通の場がこれまであまりなく、劇場運営の核心に触れずにこうした制度改革が進んでいくことへの危機感が表明され、小林真理氏(東京大学助教授)による制度導入の背景と現状説明のあと、参加者による議論を行った。(事業推進担当者 伊東正示)

ミニ・ミュンヘンDVDを作成

2004年度に在外研究でミュンヘンに滞在していたため、この機会に、子どもの創造性を育むユニークなイベント「ミニ・ミュンヘン」取材し、このたびドキュメンタリーDVD&小冊子(2800円)を制作した。

——ミニ・ミュンヘンは、7歳から15歳までの子どもだけが運営する「小さな都市」です。8月の夏休み期間3週間だけ誕生する仮設空間ですが、すでにミュンヘンでは20年の歴史があります。この「小さな都市」で、子どもは時間を忘れて極めて創造的に「遊び」「働き」「学び」ます。そして、楽しいから毎日来ます。(DVD紹介文より)

8月1日(月)15時~ 早稲田大学小野記念講堂でDVD上映会と座談会、および8月1日(月)~5日(金)同ギャラリーで、ミニ・ミュンヘンの写真・資料展を開催する。

詳細はミニ・ミュンヘン研究会まで(<http://mi-mue.com>, info@mi-mue.com) (事業推進担当者 卯月盛夫)



Event Calendar

◆演劇理論研究(舞踊)コース

日本における伝統的身体—第一回:「雅楽の身体」

開催日: 7月11日(月) 18:30~20:30

場所: 早稲田大学小野記念講堂

講師: 三田徳明 (瑞穂雅楽会主席楽師・東京芸術大学講師)

司会進行: 尼ヶ崎彬 (舞踊研究コース客員教授)

◆演劇理論研究(西洋/比較)コース

第2回演劇論講座 「ロシア史の中のチェーホフ」

開催日: 7月22日(金) 15:00~17:00

場所: 早稲田大学西早稲田キャンパス6号館318教室

講師: 堀江新二教授 (大阪外国語大学)

◆芸術文化環境研究コース

公開ミニシンポジウム「ミニ・ミュンヘン」

記録映像上映「ミニ・ミュンヘン~die alternative Stadt
もう一つの都市~」

開催日: 8月1日(月) 15:00~

場所: 早稲田大学小野記念講堂

ミニ・ミュンヘン目撃者によるトークセッション

木下勇(千葉大学)×中村桃子(NPO子どものまち)×卯月盛夫

(早稲田大学)×脇門裕子(ミニ・ミュンヘン研究会)

共催: 早稲田大学芸術学校

◆芸術文化環境研究コース

映像と写真で見る「ミニ・ミュンヘン2004」

開催日: 8月1日(月)~5日(金) 10:00~18:00(初日のみ
13:00~)

場所: 早稲田大学小野梓記念館 (1階:ワセダギャラリー)

共催: 早稲田大学芸術学校

◆演劇理論研究(舞踊)コース/芸術文化環境研究コース

ブルガリアと日本のダンスの架け橋プログラム
「聴覚障害とダンス」

開催日: 8月8日(月)

場所: 早稲田大学染谷記念国際会館 レセプションルーム

第一部 ワークショップ 11:00~12:30

「インクルーシブな活動としてのダンス」

第二部 シンポジウム 14:00~17:00

「聴覚障害とダンス~ブルガリアと日本における現状と今後の可能性~」

お申し込み: 21coe-en-event@list.waseda.jp

◆演劇研究センター

リトアニア・ポエティック・ドキュメンタリー映画祭

開催日: 10月4日(火)~10月5日(水)

場所: 早稲田大学小野記念講堂

10月4日(火) 13:30~17:30

①レクチャー ルータ・ノレイカイト(映画・演劇評論家、ジャーナリスト)

②映画上映 リトアニア・ポエティック・ドキュメンタリー精選集1

③参考上映 宮崎淳「Frontier」(2003年、カンヌ映画祭受賞)

10月5日(水) 13:30~17:30

①映画上映 リトアニア・ポエティック・ドキュメンタリー精選集2

②シンポジウム 「ポエティック・ドキュメンタリーとは？」

アンドリウス・ストニス(映画監督、プロデューサー)、ルータ・ノレイカイト(映画・演劇評論家、ジャーナリスト)、宮崎淳(映像作家)、司会: 岩本憲児(早稲田大学教授)

共催: リトアニア共和国大使館

◆演劇理論研究(東洋)コース

演劇講座 「ユネスコ世界無形文化遺産崑曲・中国伝統演劇京劇」公開稽古・公演

①公開稽古

開催日: 10月17日(月) 14:40~

場所: 早稲田大学小野記念講堂

②公演「崑曲京劇公演」

開催日: 10月18日(火) 15:00~

場所: 早稲田大学大隈講堂

主演: 董文華、出演: 天津京劇院、助演: 新潮劇院

③企画展示「京劇資料展」

開催期間: 9月26日(月)~10月31日(月)

場所: 早稲田大学演劇博物館

主催: 早稲田大学演劇博物館

◆演劇研究センター

多和田葉子講演会

開催日: 11月7日(月)

場所: 早稲田大学小野記念講堂

◆古典演劇研究(歌舞伎・日本舞踊)コース

ポール・クローデル没後50年記念公演「女と影」

開催日: 11月28日(月)

場所: 早稲田大学大隈講堂

出演: 中村福助ほか

演劇研究センターメールニュース配信のお知らせ

演劇研究センター主催の公開研究会やシンポジウムなどの情報をメールニュースでお届けします。

(1) 配信は不定期です。

(2) 個人情報はメールニュースの発信および演劇研究センターからのお知らせ以外には使用いたしません。

(3) ご不要の場合にはいつでも配信を止めることができます。

(4) 携帯電話のメールアドレスには配信いたしません。

登録は右記のホームページからお願いします。 <http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/index.html>

*以上のイベントの開催場所に関しては、下記のホームページをご参照ください。

<http://www.waseda.jp/jp/campus/index.html>



『知の劇場、演劇の知』

(岡室美奈子編 ぺりかん社 2005年3月発行)

演劇理論研究(西洋/比較)コースが2003年度に開催した演劇論講座の記録を『知の劇場、演劇の知』として刊行いたしました。プレヒト、オニール、シェークスピア、ベケットなど演劇界の巨人について、内野儀、宇野邦一、大橋洋一、桑野隆、谷川道子という第一線でご活躍の先生方が刺激的な論を展開しています。

(客員研究助手 川島健)

『初期オペラの研究—総合舞台芸術への学際的アプローチ』

(丸本隆編 彩流社 2005年4月発行)

演劇理論研究(西洋/比較)コース、「オペラ/音楽劇の演劇学的アプローチ」プロジェクトの2年余にわたる研究活動の成果を凝縮した『初期オペラの研究—総合舞台芸術への学際的アプローチ』が、彩流社より刊行されました。日本では近年、オペラ文化がますます活況を呈している半面、学術的な面でのオペラ研究は、まだまだそれにふさわしい進展をみせていないように思われます。本書は、そうした現状に一石を投じるべく、演劇学を中心に、さまざまな専門分野に属する12人の研究者が結集した学際的・総合的なアプローチとして、特に「17、18世紀」という共通項を設定し、オペラ/音楽劇に内在する諸問題の解明を試みたものです。

(事業推進担当者 丸本隆)



2005年度特別研究生 秋期募集

概要:

21世紀COE特別研究生は、21世紀COEプログラムに参加し、研究に従事することができます。研究遂行上必要な図書館等学内施設の利用について便宜を図るほか、災害傷害保険の加入等を行います。給与・研究費等は支給されません。

募集期間:

2005年6月28日(火)～8月1日(月)締切

応募資格:

- (1) 本大学の博士後期課程に在学する者または課程修了者
- (2) 他の大学院または研究所等(外国の研究機関を含む)から派遣された博士後期課程在学者または課程修了者
- (3) 前2号に準ずる学歴または学識を有する者として、大学が特に認める者

採用期間:

2005年9月1日～2006年3月31日(今年度内の採用となります)

詳細は下記のホームページをご覧ください。応募書類の書式もこのホームページからダウンロードできます。

<http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/jp/student/index.html>

編集後記

早稲田大学演劇博物館21世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」のニューズレター第1号をここに上梓することができた。まずは紙面づくりに関わっていただいた方々にこの場を借りて御礼を申し上げたい。

編集の作業は主に各コースの研究助手によって行われた。このプログラムは多くの講演会、シンポジウムを企画している。各イベントはコース別に行われることが多く、2005年度から採用された助手同士はおのおのの作業に忙しく、横のつながりは希薄なものであった。このニューズレターの編集の仕事が我々にとって実質的にはじめての共同作業であり、互いを知る機会でもあったわけだ。

これから年3回発行予定なので、2006年度の終了までに今号を含め計6号の発行をすることになる。このような作業はどれだけ事前から準備をしても直前はバタバタとするものである。今回の編集ももちろん例外ではなかった。これから後5回、このようなドタバタが繰り返されると思うと意外に愉快な気がする。

News Letter 第1号

2005年7月20日

編集:江口文恵 川島京子 川島健 木村理子 志村三代子 宮崎刀史紀

発行者:早稲田大学21世紀COEプログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉

提点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館・演劇研究センター

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL: 03-5286-1829

URL: <http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/>